

東京外国語大学総合文化研究所が設立されてから、もう八年もの歳月が流れようとしている。研究所の雑誌《総合文化研究》の刊行は研究所設立の一年後だったから、二〇〇三年度の本号は第七号ということになる。創刊号から第六号までは、それぞれロシア・東欧、東アジア、東南アジア、ヨーロッパ・地中海、英米・ドイツの地域の文化と文学の特集をおこなって好評を得た。

本号ではそれをうけて、今度はまったく新しい観点から特集「越境性のアポリア」を組んでみた。その結果きわめて充実した内容になったことを、編集責任者の亀山郁夫教授はじめ、執筆された方々に感謝したい。また、寄稿論文もこれまでになく数多く出揃い、本号は予想以上に内容豊かで大部のものになった。私たちの研究誌の今後を楽観視させるに足るものと言えるだろう。

とはいえ、本年三月をもって思想文化論の上村忠男教授、イギリス文学のジャン・B・ゴードン教授、モンゴル文化・文学の蓮見治雄教授の三名の所員が退官される。さらに、本年四月からは大学が独立法人化される。それゆえ、本研究所をめぐる内外の状況は逆に、かならずしも楽観を許さないものがあるのも事実である。どうか、この度の東京都立大学の非文明的な愚挙に象徴的に現れているように、この国で経済至上主義の浅はかな風潮が支配する中で、文学・文化研究が今後、深刻な逆境に遭遇する可能性すら否定できない。しかし文化の軽視、もしくは単一化の未来は、端的に人類の動物化にほかならない。私たちはそのような風潮に逆らい、これまで以上の覚悟と熱意をもって、それぞれが専攻する文化・文学の研究に邁進するばかりでなく、本号の特集にその端緒が見られるような通文化的な試みを、益々積極的におこなっていくべきだろうと思われる。